
歪な笑顔

春波

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

歪な笑顔

【コード】

N1614C

【作者名】

春波

【あらすじ】

妹はあることをオレに問う。それはオレにとって鬱陶しくて邪魔で価値の無いこと。長くて終わりが見つからないであろう面倒くさい質問。オレにとっての終わりはきつと無い話。

「なんでにいいは笑ってくれないのかな」

と、妹はオレによく質問してくる。話が途切れた時、友達が笑っている時、あるいは何の前触れも無く、妹はオレにそう質問してくる。

「笑ってくれないのかな」と言われても、ただ単に話が面白くないからとか、そんなふうに見えるしかないわけなのだ。しかし、そう返すと妹は怒り出すのだ。真面目に答えるとかなんとか言つて、突然不機嫌になる。妹が拗ねると手がつけられないので、なるべく怒らせないようにはぐらかして答えるようにしているのだが。

そして今日も、突然唐突に妹はオレに問うた。

「にいい。なんでにいいは笑ってくれないのかな」

オレは鬱陶しく思うが、妹の機嫌を損ねさせたくないなので、無理矢理どうにかはぐらかそうとした。

「にいいはよく笑ってるじゃないか。ほら、輝いてるだろ」

無理矢理、にっと歪に口の端を吊り上げるようにした意味の無い表情を　こんなもの*うとは言わない　妹に晒す。そんなこと、やりなれていないので、頬がびくびくと痙攣するような感じになる。2秒で限界だった。

肩を竦めて妹から視線を逸らし、読みかけの本にしおりを挟んで机に投げ捨てるように置いた。長くてぐだぐだで、2、3ページ読めば最後の展開がわかり切ってしまうような、特別に極上にくだらない、どーでもいいですねみたいな話。そんなもんを丁寧に扱えと言う方がどうかしている。本はバウンドするようにしてから、床に落ちた。

妹はそれを拾い上げ、机の上に置いた。

「駄目だよにいい。お父さんの本をぶん投げるのも、わたしの質問にちゃんと答えてくれないのも」

「はいはいそーだね。悪いけどににいは勉強するため部屋に引きこもりますんで、邪魔しないこと。よろしく。あーちゃんの質問にはいずれ答えるよ、気長に待っててくれれば嬉しいんだけどね」

あーちゃんとは、妹のあだ名だ。妹の友達が呼んでいるのを真似して言ってみた。すると妹は嫌そうに首を振るのだった。拒絶を示すかのように。

そして、言った。

「にににには　そう呼ばれたくない」

胸くそ悪いから……とでも付け足しそうな声で、表情で、妹は続ける。

「やめてね、あーちゃんって呼ぶの。わたしのことをあーちゃんって馴れ馴れしく呼ぶんだったら、ちゃんと笑ってよ。ににに。いっつも無表情で、いっつも適当に人に合わせて……面白いことがないとか言って。面白いことがないから笑えないなんて、言い訳するんだったら、わたしのことあーちゃんなんて呼ばないで。本当に、やめて」

妹ははつきりと拒絶した。

まあ、笑わない限り妹をあーちゃんと呼べなくても、特に不自由はないのでいいのだが。妹も進んでオレにそう呼ばれたいとは思っていないだろうから。肩を竦める程度で流せる話だ。

オレは肩を竦めてから、ふうんと鼻を鳴らし、ひらひらと手を振りながら部屋に戻ろうとした。が、狭い廊下を妹が行く手を妨げるように立ちはだかつて、どうにもこうにも動けない。進路方向が真っ直ぐなわけで、後ろに下がる義理はこれっぽちも無い。

どうやって妹を退かそうか思考していると、妹が口を開いた。

「部屋に戻るんなら、どうやったたらきちんと笑えるのかちゃんと考えてきて」

「……………はあ？」

多分この時、オレの顔はとても変な感じに歪んでいただろう。

オレはしばし妹を見つめ、ガジガジと頭をかいてから、腕を組ん

で疲れたように息を吐き出して、妹に言った。

「あのさ。オレがそんなこと考えるとと思う？真剣に。そんなことしたら天変地異の前触れだぞ。つうか、なんでお前さあ、笑うっていのにこだわるの？はつきり言ってお前みたいな奴の気が知れねえんだけど。なんで自分の利益にもならないこと考えなきゃいけないんだ？」

きつめに、そう妹に問うた。

妹は少し俯くようにして、唇を微かに動かした。何も聞こえるわけがなく、オレは数歩、妹に近付いて、妹の顔を覗き込むようにした。妹は少したじろぐようにしてから、呟くように小さくぽつりと言う。

「……………にいにいが笑ってくれないと……………わたしも笑えないから」

そう喉の奥から絞り出すように言うと、オレを押し退けてどこかへ逃げてしまった。逃げた。そう表現する他ない。

それにしても 「にいにいが笑ってくれないと自分も笑えない」か。そんなことを言うのはさぞ恥ずかしかったのだろうなどと適当に考えながら、オレは自分の部屋へと戻る。鍵をかけて、誰も出入りが出来ないようにした（入って来ようとする奴は、いないと言ったらいいのだが）。

妹に宣言したとおり勉強でもしようかと、教科書や問題集に手を伸ばすが、やる気は起きなかった。

畜生が、と毒づいて椅子に体重をかけるようにしてから腕を組んだ。したくはないが、妹の命令どおり「どうやったらちゃんと笑えるかきちんと考える」という作業をしなければならぬようだった。10秒ぐらい黙って何も考えないでいたが、ふと無理に勉強をすることによって笑うなんぞというくだらないことを考えると言われたことを、すっかり頭から追い出そうかと考えたが、もっとよくよく考えて、勉強とか何か考えるとかそんなのをすること自体を放棄しようという決断をくだすことにした。

かと、妹に背を向ける。

「 にいいい……、……………」

「はい何か……って」

寝言だろうがそれくらいわかってるオレ。

それはオレのことを呼んだというより、オレが信じられないようなことをしたような、驚いたような、妹の寝言。

立ち止まって観察していると、妹の唇が少しだけ歪んだような気がした。微笑むように。なんだ、オレが夢の中で笑えるようなことをやっているのだろうか。「コマネチ！」なんてやらかしてやらかしていないだろうか。無性に心配になってきたぞ。

「…………、 にいいい」

何度も確認するが、これは寝言で、オレを呼んでいるわけじゃない。だからまあ、現実世界のオレがこの場を去ろうが、夢の中の妹には関係ないのだろう。しかし、こう何度も名前を呼ばれていると「傍にいなきやなー」なんて思ってしまっわけだ。というわけで、オレはシスコンじゃないシスコンじゃない、決してシスコンではないぞ。

静かに妹の隣りに腰をおろす。

小さな妹の身体は、足を伸ばしても頭2つ分余ってしまうくらいで。足を折りたたむようにして眠っているから、オレが座れるくらいのスペースなんて、目茶苦茶あるわけだ。

妹はまた呟く。

「もつと……て、 にいいい」

聞き取れない。

いや 聞き取れてはいるのだが、その単語が嫌いだからとか、とにかく脳味噌が聞こえないということにしている。妹のことをあーちゃんと呼んで妹がそれを拒絶した時のような感じ。その言葉はオレが最も拒絶するもの。

だがこう、やんわりとした表情でそうお願いされるのは 悪くはない。不覚にもそう思った。

妹のこの表情から見て、夢の中のオレは妹の望んだとおりに*っ
ているのだろう。夢の中だけではこいつは満足しそうにないけれど、
一時のでも、少しくらいは幸せと感じているのだったならば 特
に何の感情も持たないか。よくわからないけれど。

しばらくして気が付いたら、ただただ寝息しか聞こえなくなっ
ていた。

さて、そろそろ寝顔を見るもの飽きてきた。散歩をしてこよう。
ソファを揺らさないようにゆっくりと腰を上げ、もう一度妹の顔
を見つめてから頭をくしゃりとひと撫で。そうすると、とてつもな
く嫌そうな顔をする可愛い妹だった。

「ん……」

妹はぱちりと目を開ける。

「おはよう」

「ひあっ！……に、にいにい……」

顔を覗き込んでいたら、かなり引かれた。

あれから妹は、オレが散歩から帰って来ても眠っていた。何があ
ってそんなに眠れたのだから謎だが、とにかく眠っていた。そして
今やっとこさ起きだしたのだが、最悪なお目覚めになったらしい。

俺の方を見て思いつきり眉を顰めるのだった。そりゃあそうだと言
われたら、返す言葉が無いのだけれど。

妹はきよろきよろと視線を泳がせ、それからガシガシと頭をかい
た。何か思い出そうとするようにぼおつと天井を見上げ、諦めたよ
うにため息をついた後一瞬だけオレの方を見、唇を尖らせ視線を逸
らした。

「……なんだよ。オレの顔を見て変な顔するな。そこまでオレの無
表情はヤバイのか？それとも夢の中でオレが変なことをやっていた
のを思い出して恥ずかしくなってしまうのか？ん？」

「いにいがわたしの夢の中で変なことやってたら、うなされてる
よ……ここまで寝ない」

「あ、そう……」

オレが一般的に変なことと言われる事をする、夢の中であろうと嫌らしかつた。そんなになされるくらいなら1回、この現実世界で実際に妹の前で適当なコントの一発ネタでもやって見せようか。うん、考えただけで妹が可哀相だ。やめておこう。やりたくもないし。その代わりと言ってはなんだが、

「なあ。どんな夢見てたんだ？にいにいとかにいにいとかが。寝言言つてたぞ、お前」

そう言った。途端に、妹は信じられないと言わんばかりに目を見開き、こつちを見てきた。

「……う、嘘だ……嘘でしょ？にいにい……」

「いや、オレこういうことに関しては嘘吐かねーんでな。ずーっとにいにいって言ってたから、嫌がらせがたら隣に5分くらい座ってたんだけど。気付かなかつたか、やっぱり。気持ち良さそうに寝てたもんな」

鼻を突いたことと頭を撫でたことは言わないでおいた。なんとなく気まぐれで。

妹は更に頭をガジガジとぐしゃぐしゃに引っかき回すようにして、突然オレの方を見て頬を真紅に染め上げた。そして何やら唇を動かしてからまたも顔を隠すように、長い黒髪をかき回す。

何をやっているのだから。オレは、妹のおでこをげんこつで軽く殴って落ち着かせてやった。

「落ち着いたところでもう一度聞かせていたがな、一体お前はどんな夢を見ていたんだ？にいにい、にいにいって連呼して」

オレはしつこいくらいに、聞く。少しくらい、わかっているのに。無理に追求しなくても、わかっているのに。

想像だけだ。

「らしくねえ……」心のどこかでそう呟きながら、オレは妹の返答を待った。この返答に関してなら、何時間でも待ってやれると思えた。

「……………。にいい、が」

「オレが？」

「……………。わたしに、わたしだけに……………」

「お前だけに？」

「……………。笑いかけてくれたの！……………。つ、にいいのバカ！寝言聞
いてたんなら、わかってたんでしょ？いじわるにいい！」

いじわるばあさんかよ。

どうでもいいオレの突っ込みは無視していただくことにして

妹はむ、と頬を膨らませてそっぽを向いた。その頬はほのかに赤く、
普段オレの前での質問の時に見せる表情以外はあまり見たことが
無かったので、何となくだが新鮮だ。

……………。まあ、これが普通のありきたりな　そう言ったら失礼だろ
うが　お話ならば、オレはこの後妹にはにかみながら、恥ずかし
い台詞のひとつやふたつ吐き捨てて慌てて部屋に戻って行くのだろ
う。しかし、オレはそんな気の変わりが早いお話の主人公や、ある
時急に正義の味方に成り代わってしまうような悪役ではない。主人
公は初期の頼りないまま、悪役は正義を挫く悪役のまま。そんな感
じだ。捻くれているなんて言われても、そんなもん否定するほどの
ことじゃない。

だからだらだら、捻くれたまま　オレは自分の物語を終わら
せるだろう。そんなことは、実に簡単だ。

ああ、そうだ簡単なんだ。

じゃあそれにさつさとピリオドを打つてしまおうか。

くだらない、妹との*うことについての、実に長かったお話に。

書き上げるまでに、実に14年間もかかってしまった、くだらな
い上に下手で面白くも無い、このお話に。

無駄に拒み続けたことにピリオドを。

思えばただ疲れただけなのだった。

「……………」

「……………。なあ」

面倒くさそうな呟きのようなものが、オレの口から吐き出される。「……………?何?」

「全部が嘘でも、全部が偽りでも、お前は受け入れる?」
それでもいいなら
と、ちよつと格好つけて。

「それでもいいなら 笑ってやるけど」
もしこれで許してくれるのなら、今からでもオレは妹をあーちゃんと呼ばせていただこうなどと考えていた。

あーあ。結局はどれとも同じオチ。つまんねえな 妹はなんと返してくるのか。楽しみだ。わくわくしてきた。早く答えてくれよ。「……………」

妹は戸惑うようにし、ふと微笑みながら オレがお目にかかった色々な微笑より何倍も美しいと感じてしまっくらしいの微笑で言った。

ゆつくりと唇が動く……………否、動き始めた。もどかしい。物語の終盤は無駄に長いような気がして嫌いだ、早く言え。スローモーシヨンのようだ。やめる。なんで勝手に映像の動きを遅らせるんだ、オレの脳味噌めが。終わるのならば、終わればいいのに。

妹は言った。

「それなら笑わない方がマシだと思うよ、にいにい」

「クク、ありがとう。お前には感謝するぜ」
思わず嫌らしく笑っていた。

「わたしは、にいにいが心からやさしく笑ってくれるようになるまでずっと聞き続けるよ」

そう言っつて、妹はオレに問う。前とは少し違っけれど。

「なんでにいにいは笑えないのかな?」

それにオレは肩を竦める。

「何言っつてるんだ、にいにいは心を込めて笑っつているぞ?」

永遠に続っく、オレと妹の楽しくつまらないお話。きっつと最後は

。

想像できるだろ？簡単だ。

今のオレの、3つの願い事をお聞かせしよう。

妹に納得のいく答えを。オレに納得のいく理由を。永遠にピリオドを。

歪な笑顔

(後書き)

無理があつたのですが書き上げたので温かい目で見ておいてください。意味わかんねえといわれましたら、私自身も意味わかんねえと返すばかりです。

このお話に意味は きっとないのでしょうね。ごめんなさい。最後の方はお見苦しかったです。すみません。

でも、もう終わりです。目茶苦茶でぐちゃぐちゃで意味がわからなかったお話は、

もう終わります。ここまで読んでくださってありがとうございますとごぞいいます。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1614c/>

歪な笑顔

2009年3月24日09時22分発行